

作業をさせられた。その時は強い力も出なかった。一週間くらい船を待つ間、「共産黨員になるか」と言われ、「ならない」と言うと言われ、「帰してもらえないので彼らの言うとおりにした。乗船するときは体調をくずし、階段登りはとてもつらかった。でも、帰れるうれしさに耐えてきました。船内で寝ていたが、食事に玄米のご飯を食べたのは忘れることができない。無我夢中であつた。舞鶴港は昭和二十二年四月であつた。着いてから舞鶴港でふろに入り、新しい衣類（軍服）をいだいて着用したときのうれしさは、骨身にしみて忘れられない。だけど、つらかつたことは思い出したくない。

私は帰還できましたけれど、亡くなった方々は気の毒です。平和な日本、平和な世界、戦争はなくしたいと切にお願いしたいです。

入ソ当時の記憶

埼玉県 兵藤 真三

終戦後五十年経っても忘れられない記憶として入ソ時の辛苦を思い浮かべ、酷寒のシベリアでロクな食事も与えられず、過酷な労働で生命を失った多くの戦友に対し、心からご冥福を祈る次第です。

一九四五年十二月ホルモリン五取容所三三二分所へ移動するまで経験もなかつたマイナス三七度は、いかに強烈な寒さであつたか。とにかく筆舌に尽くし難く、酷寒とはこんなものかと思ひ知らされた。支給された防寒外套はカシチョール（焚き火）の火の粉で点々と穴があき、中の綿が燃えていても分からない。特に足元は感覚がなくなり、防寒靴の先は焦げ放題。火にあたりながらお互いに焦げ臭い匂いがしたら注意し合つた。顔、頭は防寒帽で覆っているが、特に鼻だけは気をつけ、鼻先がローソクのような色になると凍傷、す

ぐ手のひらでマッサージしなければならぬ。これも自分では分からず、それぞれ人の顔を見て注意し合つた。それでも夜、ペチカの前で凍傷にかかつた足先を暖め、苦しんでいた者もいた。

食事は朝夕とも雑炊を飯盒の蓋に八分目くらい。昼食は、夕食後に支給される黒パン三百グラムくらいと塩鱒一切れであつた。中でもひどい夕食があつた。それは糲の粥である。大匙二杯くらいの糲の入つた粥が飯盒の蓋に半分くらい、一週間くらい続き、最初のうちは糲を噛んでははき捨てたのであるが、三日目くらいになると、空腹のためその糲もジャリジャリ噛んで飲み込んだのであつた。糲も粟やコーリヤンなどの支給される雑穀の中に加えられたようである。腹にたまるものがないので、五日目くらいの用便は糲の固まりであつた。皆で狼の糞だと笑つた。また、折角の雑炊の中に梅干と同じ杏の漬物をそのまま漬け汁と一緒に煮込まれ、まるで豚も食わないすっぱい雑炊もあつた。翌日の昼食用のパンと鱒は当日の食事当番が切つて分配するのであるが、厚い薄いがあるのですべてクジ

引き、困んでいる目はそのナイフの刃先に集中した。パンは就寝の前に胃の中へ、したがつて昼食は鱒一切れであつた。飯盒に氷や雪をいっばいに溶かし鱒を入れて煮たスープであつた。労働時間が終わり宿舎に帰つてから夕食までの時間の長さ、雑炊がたとえ飯盒の蓋に半分であつてもそれが待ち遠しく、ただ満腹感を味わいたいために飯盒に氷を入れて雑炊をいっばいにのぼし流し込んだ者もいたが、これは栄養失調の始まりでもあつた。食事が終わるとハイエナのように、近くにあるソ連人の家のまわりに捨ててある魚の骨、ジャガイモの皮、スープに出した豚の骨などを拾いペーチカで焼き、一時の腹の足し?にした。幾多の戦友が餓死同然で命を落としたが、今日は他人の身、明日は我が身で、飢えた動物と同じ、目ばかりギラギラと光り涙も出なかつた。

昭和十九年十二月十日、岐阜県美濃市から千葉県東部八十三部隊に入隊。当時二十六歳。

北支独立歩兵二〇五大隊歩兵砲中隊に編入。第十三期甲種幹部候補生。

関東軍石頭予備士官学校第六中隊五区隊から、八月九日ソ連軍侵入のため、後発隊として東京城方面へ出陣。

昭和二十四年八月、明優丸で帰国。

シベリアの四年間、ほとんどがバム鉄道建築関係の重労働であった。ソ連は幾十万の日本人を無償で酷使したのである。そしてあの長い鉄道が完成した時は過ぎ、市井では若者が青春を謳歌している。彼らに、この平和の礎となった当時の若き戦士が、シベリア以外でも、陸に海に空に尊い命を散らし、また懸命に生きたことをお伝えできれば幸いである。

思いつくまま

滋賀県 望 田 宇三郎

昭和十九年二月、現役召集により満州第六一二部隊砲兵隊第四中隊に入隊。広島西練兵場に集合の上、博多港より出航、朝鮮釜山港に上陸する。ここから列車

で入隊地、黒河省朝水の兵舎へと向かった。朝鮮を経て北満の黒河省朝水駅に着いたのは約一週間後のことであった。

駅に降り立ち、見渡せば、白一色の銀世界の広大な原野。兵舎までの距離は約二キロ、徒歩で兵舎へと向かう。

朝水は砲兵一個中隊、歩兵二個中隊の陣地で、営門を入り右側に砲兵中隊がある。砲十門、榴四門、高射砲三門が配備されており、観測、通信、砲手の三部に分けられて、初年兵教育が実施された。私は観測班に属し訓練を受けることになった。

第一期の検閲も無事終了し、厳しい寒さもようやく和らぎ、凍てつく大地も溶け始め、野山に花が咲く季節となり始めたころ、陣地周辺の防衛のため戦車壕構築の作業が始められた。

翌二十年七月、部隊の編制が変更され、大隊が三個中隊編制設置され、挺身大隊第三中隊に転属。挺身隊とは、重火器などの兵器はなく、専ら肉迫攻撃訓練が実施された。そして、中隊は二站^{ぶた}陣地防衛のため移動